



奇復
詒儼

自來也後編



^ 13
3329
7



明 へ 13
3329
卷 7

報仇
奇談

自来也 說話後編叙



大正十年八月九日寄
本大學出版部贈

善游者、溺善業者、路と人人の道と不
行も勇武も却て其身成さるるに
悪名とせし傳は坊書也尾形周馬寛行
異名自来也半点義に依り猛勇なる人

自来也見古後編卷七

たゞ乃道^{ちち}に背^{そむ}じ賊^{ぞく}徒^との行状^{ぎやうじやう}終^{はつ}じ身^みと^とこ^こ一^{いつ}

汚名^{かどな}と名^な面^{めん}を殘^{のこ}ひ^ひう^うや狂人^{きやうじん}ハ真^ま似^にと^とて大^{だい}

踏^ふと走^{はし}郎^{らう}狂人^{きやうじん}なり^{なり}悪人^{あくじん}の^の不^ふ仁^{にん}人^{にん}を^を殺^{ころ}さ^さす

即^{すなは}悪人^{あくじん}也^{なり}詐^{まが}て^て賢^{けん}と^と學^{まなぶ}び^び賢^{けん}と^と學^{まなぶ}び^び以^{もつ}這^こ前^{ぜん}後^ご

十卷^{じゆくわん}の書^{しよ}自^{みづか}来^{らい}也^{なり}の悪^{あく}行^{ぎやう}と^と級^{きやく}を^を説^{あや}話^わと^と似^に

中^{ちゆう}に^に義^ぎ小^{せう}似^にて^て不^ふ義^ぎ事^じの^のれ^れい^い童^{どう}僕^{ぼく}意^い

我^{われ}真^まに^に聞^きて^て善^{ぜん}乃^{なり}不^ふ善^{ぜん}勇^{ゆう}の^の不^ふも^も勇^{ゆう}と^と無^なへ

侍^しハ乃^{なり}勸^{すす}善^{ぜん}懲^{ちやう}惡^{あく}以^{もつ}一^{いつ}曲^{きよく}の^の書^{しよ}肆^しの^の需^す

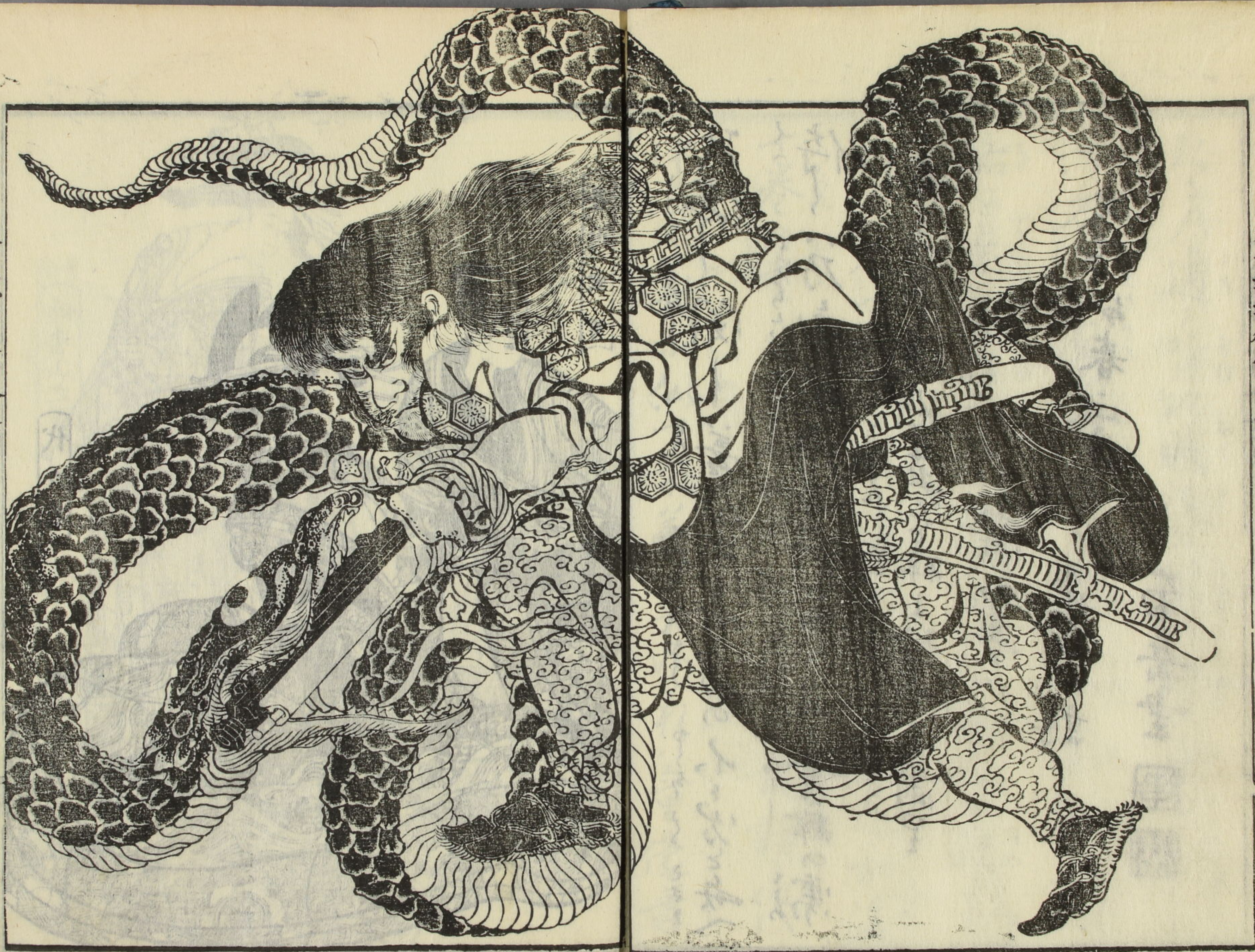
一^{いつ}進^{しん}して^て後^ご編^{へん}五^ご卷^{わん}を^を梓^し行^{ぎやう}ふ^ふこと^{こと}雨^{あめ}つ^つ

感和真

鬼武誌

文化下卯春正月

南岳書 印 印



龍を斬る古流の武士

龍を斬る古流の武士

代々衣



吾川宋男



破魔之助妹訂

御香山

妙香山之異人



万里野破魔之助

荒山隈五郎時綱



波魔之助妻環枚



自來也説話後編目次

第一卷

○自來也夢中遇美人併於妙香山為蝮蛇退治条

○自來也誑甘樂屋球珠右衛門併奇術奪大金条

○万里野破魔之助於金龜山得石螺併妹汀于吾川采男

戀慕条

第二卷

○勇侶吉郎正權搜自來也行衛併自來也權為

海賊条

○勇侶吉郎於鹿嶋冲逢難風併自來也劫買船而

于侶吉郎為對面条

○猿嶋金吾救吾川采男併金吾女兒贖身而祐吾川条

○朝妻歌之助到于大儀曲輪併侶吉郎与歌之助

娼妓買論条

第三卷

○自來也再度到安房國併上総國百首邑近江屋

茂八家揆入条

○千歳屋代衣愛押併押亡身報恩条

○援嶋金吾逢難併吾川采男救金吾条

○吾川采男到大磯併小厮得助計劫而兩個之

結縁条

○於上総國破魔之助妹汀戀病而死併汀亡靈

媚伎代衣喰殺条

第四卷

○勇侶吉郎到相模國温泉場併不圖入仙境条

○吾川采男逢難併万里野破魔之助毒環故

采男条

○仁木胤遠上石堂晴晁結因併自來也慶金仁木

家人而奪贈物条

第五卷

○石堂家之息女玉琴奇病併自來也于石堂家

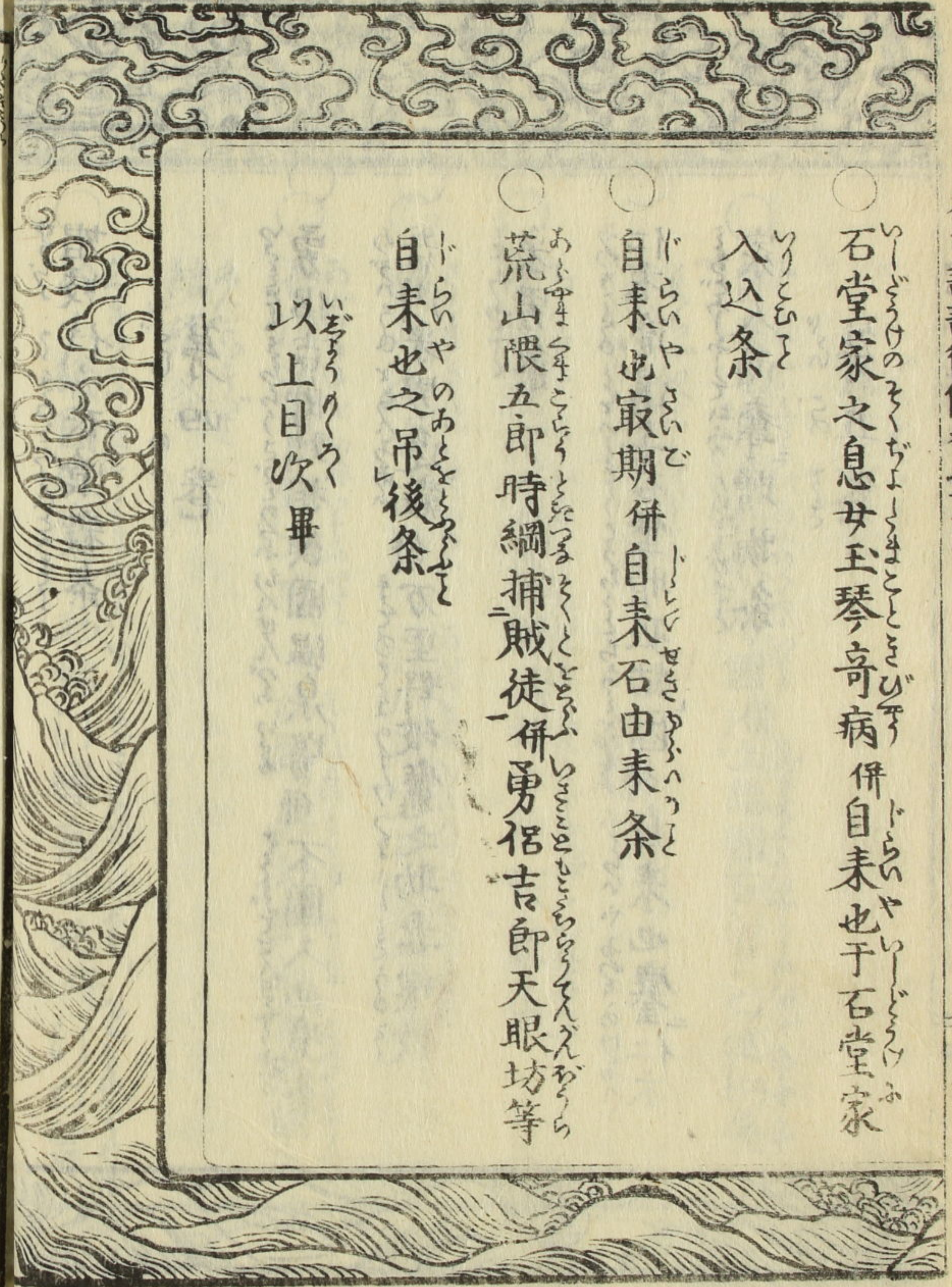
入込条

○自來也取期併自來石由来条

○荒山隈五郎時綱捕賊徒併勇侶吉郎天眼坊等

自來也之吊後条

以上目次畢



報仇 奇談 自來也説話後編卷之一

武江 感和亭鬼武著

○自來也夢中遇異人 併 於妙香山為蟬蛇退治条

舍己而教人者逆正己而化人者須逆者乱之招順者治之要之と云々去後

に星霜相移延徳年中足利十代義植公の治世にあり頃三好家の浪士

尾形周馬寛行異名自來也い安房函鏡浦小舟にあり男侶吉郎正輝の

祖父父母の仇討を見届其場より互列を權く相摸国鎌倉のほと

と成暗小徘徊做世の光景を窺りるをより一夜熟寝する枕辺小一個の異

人を見られ身辨りてめりるさゆりて云々武がる声音と撞ひつらうい

周馬寛行過一頃越後国妙香山小舟にあり相見一術を授け予あり

覺ありや今危き小逼り馮とて一糸あつて茲迄特々未だつちり起
 よ寛行目見えよ自來也と呼ぶ声の涼耳小入り自來也眼と睜宛仰
 見て大に驚き心起立拜伏做一這者何計ぞ大人の光臨如何なる動靜
 の作や一術多きとも扱玉一師の大恩をどう却と做らばは馮乃
 次序不意置説話あるべし某身小應ん程承けらんとありけれ
 ば大人怡悦の顔みくく予板年未竟を合を吞異術を
 学ばぬ妙香山小あつて身を兼小所小豈不計や汝も住る信濃形る
 黒姫山の苦問の岩屈小蟠あり一蛇近來国續ちれば妙香山小到
 りとせと怪夏累ちりといども蛇に逢くも予術行かど不能きり
 予板年の功あり予ちれば容易染がた免小一命いのむご不果共のま

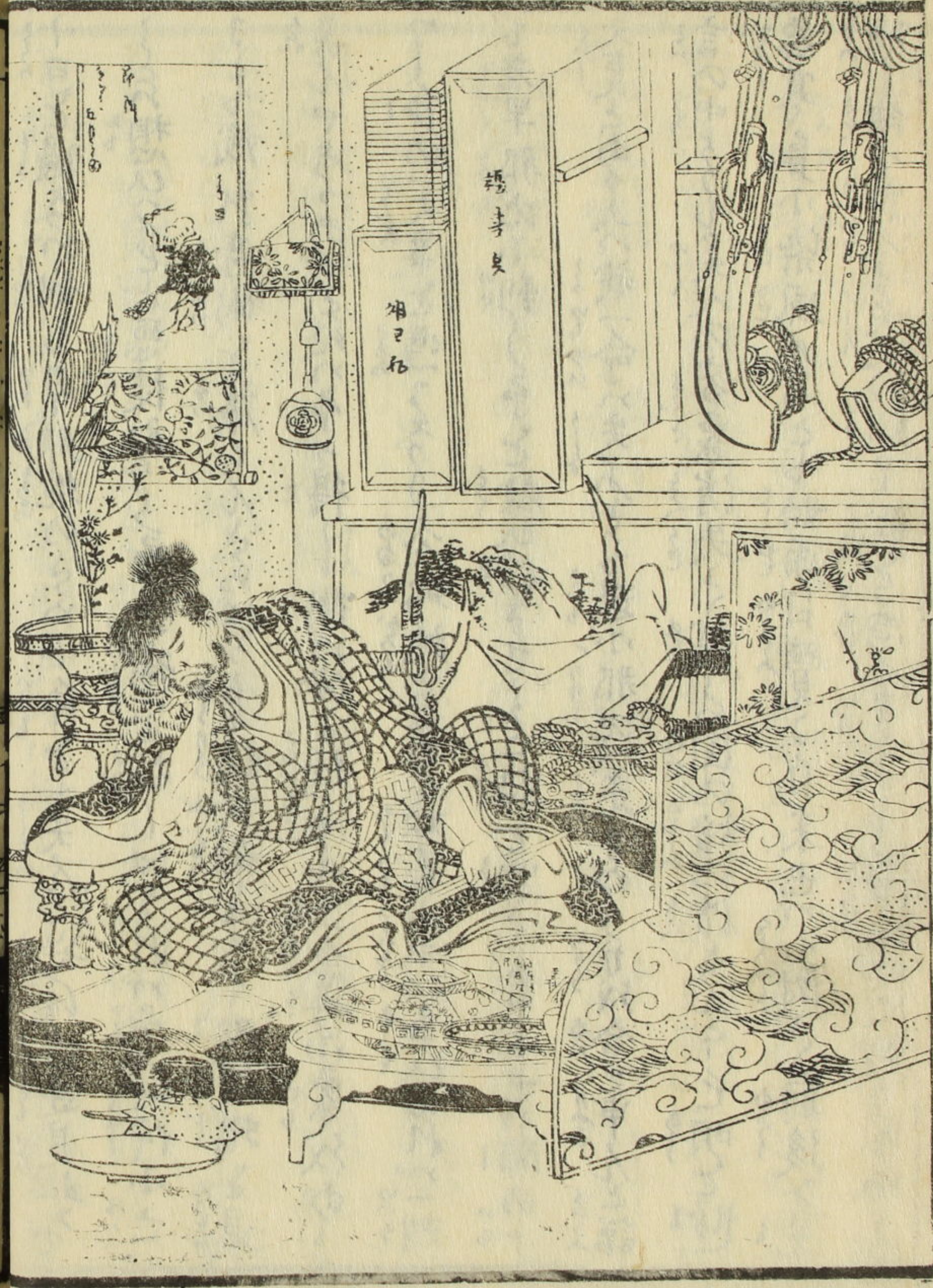
十日を過さば術もあな蛇のさぬ小命をも失んと語り這連是非を
 一とら想ひつと悪徒おが予一術を扱一汝されば予の母小亡
 とも残教奇術を譲らんといは汝が勇猛武術をりて那蝶蝎を退
 是んやあつあると汝の予が得一術の汝も扱とんと一念此小象又あ
 け一身の一大事を馮らちり今那蛇と予と妙香山中に争ひあれ一判
 も老早那地小到り予を救ひゆせよと語をばく自來也の師の一
 大夏とあつ上の我一命の失ふとも還小那地一走すあり力成合申んと諾
 言の中よりも大人の容象消失し残るの国の燈の消えんとて明を
 惡寒身小染風めりとも始而自覺る自來也の附く前後を見
 廻し備の帝今も大人の到り我を憑と見えし夢中してありけり

自來夢見人



自來夢見人
 之也
 圖

自來夢見人



相見
 相見

されあれ正しく美人の吉より夢初もあつたあれ假も一回師弟の約
 を做しける異人身の一大夏とりのりつるの因捨ちりぬ今の後とまれわく
 され越後の国妙香山に介衝と虚實と糾し来りんと夫より
 客路の難ちり小嘯嘯四五輩を従へ暗小鳥銃三挺と菰小包と
 取拿せ妙香山と志一夜と日小繼てと急ける抑越後国妙香山
 とつらを頸城の郡高田の脊後小のり山根の信濃の國境小近く
 麓より絶頂近き救十町を登り草木生茂り岩壁峨々々々絶
 巘々々尾形周馬寛行の美人の吉小路を走不日と妙香山小到り
 一深木茅押分路躒登らに暗山中を其方よ家と見巡る処小逆の峯
 此木の向よりと腥風颯と吹来り雲霧房覆ひ一岩上小指渡五六
 寸もあるべうぞんる燭の如し物明星と光り輝くもど峯以隔く

自來也射く這を觀るあれ燭とス一の眼みく象ハ角ねと牛の
 如く真黒ちるりの躑苔底と懸居るさう形れば自來也不審怪
 物哉と想ちるらんをつけくまうと苦問と看下せば岩石從耳苔清水
 滴る岩屈より救百年孫一松の古木此とけりの馬小等処頭を出
 同く日月のどた眼の光赫とくと羊角揺やく光景を山上より
 能看むは是ちん板十丈もあるらめと受ゆる蟬蛇もく岩上小あり
 くらの大ちる暮らうくとりりぬる也自來也小從の小菘とりの擺振慄
 自來也の袖をひく斯る懼所小到るが架等がた兒小命を果ん
 老早林鹿小わり玉とと色と失ひ勸むが自來也暗小くら兼而

異人の憑ける蛇の雅と足さうん予ハ此処より動静を窺ひ跡よ
 小麓小下多々〜 洪等ハ先小麓つりり予グのらと待ベ〜 小嘯
 小拿早〜 鳥銃の中十枚玉の大筒を接〜 小嘯嘯ホよるれ凡
 百有糸間を隔るる峯の此方ちる岩間の松を小揃〜 鉄炮
 小玉を込火繩をつけ〜 捲く嘯蟻と蛇の斜眼逢ハ動静を窺
 小居〜 ちるちる〜 蚊蝎ハ勢ハ強く紅の舌を出〜 僻静と岩上
 を見擡岩屈を扒出〜 上ちる蟻七火火を吹下〜 這を防ぐ
 ちれどもち〜 小窓〜 光景ぬれ〜 自来也熟〜 考〜 小異人乃
 蛇を忍怖ハ應〜 蠍蟻の術ちま上ちる蟻ハ異人〜 疾術
 大筒を取直〜 光輝眼目當に筒先あり小願若寄火蓋を
 切も不保言蛇の頭を込と打〜 覺〜 ぐ〜 蛇ハ弱も中〜 ち
 首蚕を舎置筒音の方〜 向〜 大口明扒擡〜 手疾小玉を込替
 打出鳥銃蟬蛇の咽の中〜 打〜 ぐ〜 蛇も十枚の鉄玉を
 口中〜 ちるちる〜 狂〜 益〜 谷底〜 轉〜 落〜 ちる〜 山鳴震動地
 響音〜 做〜 峨〜 ちる〜 岩壁土崩〜 藤土雲霧を復〜 暎〜 瞳
 大木を吹倒〜 ちる〜 凄〜 光景ちる〜 自来也不透鉄玉を込替〜 打
 軽小透小丸計の蟬蛇形も〜 吼〜 ちる〜 田打在〜 ちる〜 動静
 ちる〜 ちる〜 半鳥雲霧暗小は〜 岩上を觀擡〜 蟻の象ハ消
 失〜 以前の異人ハ心然と舎掌〜 做〜 ちる〜 果〜 ちる〜 光景よ〜 自来也



自來也
於妙香山
打蝮蛇
之圖

自來也



自來也

九

と招に近跟苔気なる息を継自來也小向くいつく予が憑をす
 へび蛇と退治ちりる汝が勇猛急難を救得さへ一欣躍さそ
 是形がう世後救日衆と争ひありぬも身酔勞れ今の中一命を
 保こと難一因茲約せ一と予得術ハ残ちる壺今汝小換
 ぞ一巻と取出一自來也小与せ此這者難有と一巻成押突疑
 と逸く尋意小収く自來也ハ是人を拜く后りく師弟と
 ちもくも不思議の因縁此上ハ這山中小某も足を停師の行末を
 看届んとありられハ是人頭を打振否とよ予ハ疾此終小命終
 ハ茲地小あつと益りく復汝が行狀盜賊の首領ある悪行あ
 れど今更ハ可憐ハ底小あつされハ這と止るとも入す并義氣
 ある汝が魂ちれハ緞令他手に不死共遂ある期至らん必終を
 慎く傳める術の奇特を教一名ハ後代小残さべ一さくハの声
 めろとも承く消く壺一後の煙とちりて立上りハ自來也奇異
 の想ひとち一泪双流して後伏拜意僻静ハ麓小あり多小
 嘸喰を集く里人小志くを那蟬蛸を打殺せ一場所ハ伴ハ是
 を見ると凡其丈十余丈圍四斗枵の如く物心身鮮生く頭ハ馬
 小等く一妻ハ死蟬蛇ちりりれば衆皆舌を卷嚇怕自來也の
 勇猛と感歎一里人資養魚一停其名を尋くとも壺武者
 修行の浪士と而已答く辞別ち一此所をどる出りる
 ○自來也誰其樂屋球珠右衛門一併奇術奪大金条

自來也言後傳卷之一

上野国碓氷郡下仁田てふ山あり小其子屋球珠ち彫門といふ所の金銀
 田畑多くお家族上下扱百人の暮めて近國小名高大巨富とて
 一が一日年の頃四十有余ある道人とも可謂そは右髪うまつらの僧そうじ兼あま和
 の容貌ようぼうちるが頭かぶ小綸巾せんとんの如き物ものと頂身うぶみ小麻せまの衣ころもと著ちやく一牛うし一
 藪やぶの杖つえ以突つき從ま者ま五六輩ごを延連ひきつれ忽然とと球珠たまじゆち歩あゆのあ小こ到いたり
 いと殊勝しゆせうぬる音こゝね吉きち多たていらく予これの客路きやくぢ狎な曆れきの優婆塞うゑぼさいちるが此
 小未こまるのこ家け小面せめん會かい做しよへへと知音しゆいんあつと尋たづまうりぬ其その人ひと何なに所ところ
 ありや案内あんない玉たまのれくとある小友せうともにありゆふ者もの共とも位いをを知し識し
 とも觀みたふとと懇げん小款待せうけんたい相見あひま玉たまんととりる人ひと何なにといつるのの小こ作しやく
 ふやと守まもれとと那道人などうじん答こたへといつとと其その名な不ふ及及言こと予これ相見あひまちるが列れつ

ちん厚あつ未ま疑ぎぬるのの小こありと間ま毎まい小案内せあんないあれとと思おも然しかある僧位そうゐ
 小恐怖せうこふふ主人しゆじん球珠たまじゆち歩あゆつと出い行ゆいとまれ先まづ此こゝ方かたへへと玉たまとと奥おく
 深く伴ともの中ちゆうの間ま小仙せんとん人とと見えく木この葉はの衣ころもと着ちやくるる笑わら人の
 手て小一のせいのとと指さつとと画像えがひの一いつ油床あぶらどは掛かくありつとと那道人などうじん這
 と看みる主人しゆじんと延ひき停とどめめ予これり尋たづまう人ひと此こゝ小ありと一軸いつしやくの画像えがひ小向せう
 といらと尊ごん大人だいにん如何いか絶たく相見あひま不做ふそ故ゆゑ小此こゝ後ご累るい小在せ知しとと披ひ一いつ赤
 衛ゑいりて今日こんにち巡遇じゆんぐ夏なつ予これが福ふく何なにり不如よ茲こゝ大人だいにん不知しらず孰たれ當た年ねん諸國しよこく
 難病なんびやう流行りやう做しよ一いつ多たく人ひとを傷やと欲ほは是こゝを救得すくるるあある大人だいにん
 の秘藏ひざうせり一いつ茶ちやあつとと病びやう答こた以も除ぞん夏なつ難なん一いつ因よ茲こゝ其その名な茶ちやを
 権けん一いつの中ちゆう予これに借玉かへへ此こゝ難なんと避さんんと予これ小馮ほう者ものあつとと祐得すくるる

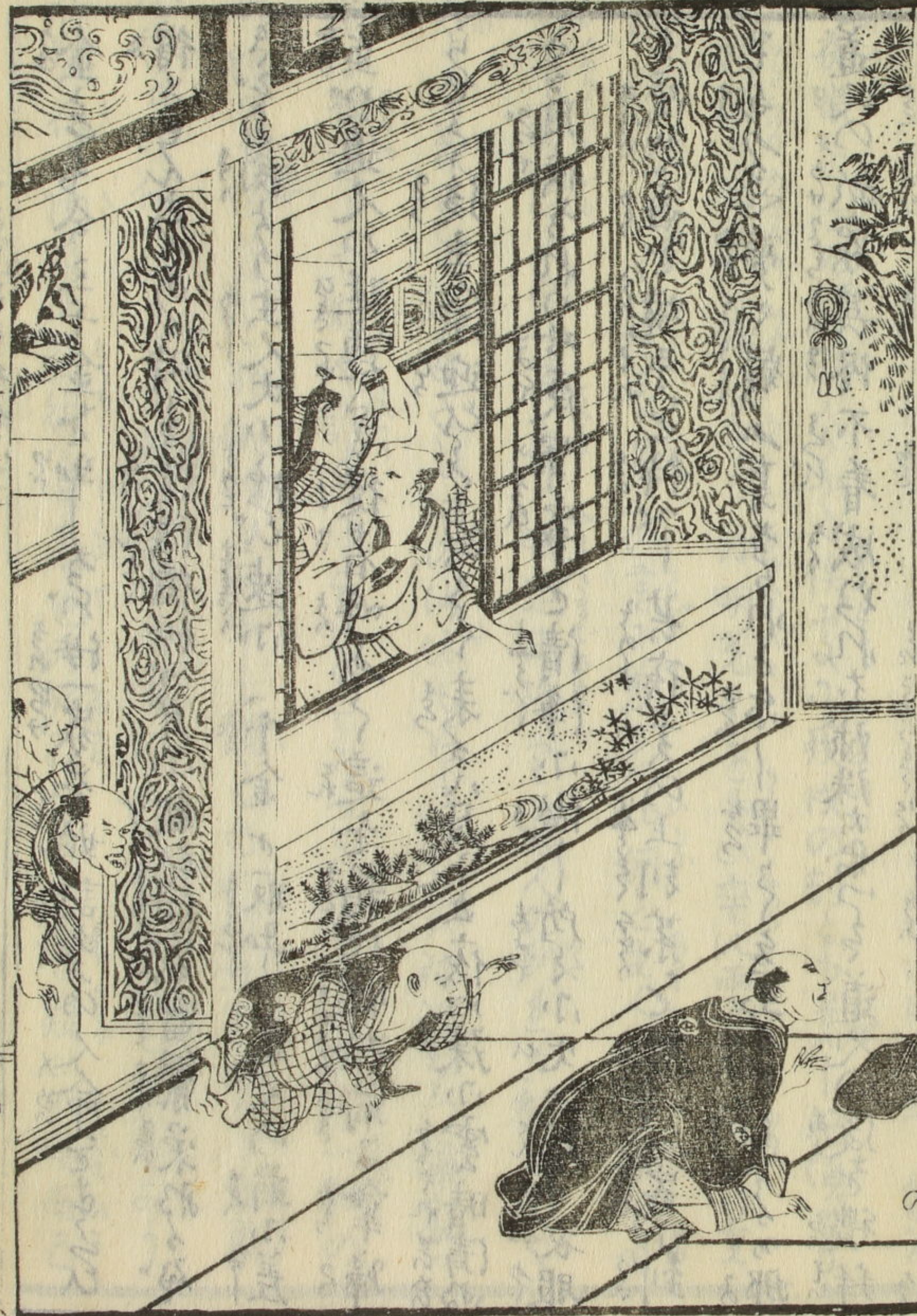
自來世言後傳卷一

十一

此夏大人に相見の上張ゆくと特々尋まうり一うりとありけれの
 植栽床小掛る画像の僊人打點兒拘、拿るる一の差を差出
 せむ此方の道人とを接此一茶ある上の許多の人の一命を救ん
 夏予が大幸大人の仁惠小依る処と頭を低く禮拜一僻語こ
 と表の方へ多出るほど主人殊殊ちあつ先刻より奇々此と心相
 ひ傍小動静を看浩ありうが那差を携乃道人の立歸さぬれば
 忙慌衣の袖小取携り拜伏してとて権く叩玉るべ一帝今の右
 枝有葉ありゆの當年病難あつ許多の人を傷との命あつ
 る小の大人這を救ひ玉んとの夏をこの僕か家族凡百有余人あり
 此者との一命もその人の神術を以て救ひ一家の病難は免れと志ん
 之とありけれの道人微笑とて伊原末家富るといふも身小
 智ても金銀を惜のふあも此茶調合做一他を救らんとの許多乃
 金あつされの外調合の茶不足故小これより富家廉直の人を
 尋黄金を調達さう一其一家の素世上の人を救んと欲する那れ
 む不便ちれども今汝一家を救み夏不能と答へ袖を拂つとて
 んとせむを殊殊ちあ尚も推由僕不益の夏小金銀を費してとて
 懐けれど斯う一大事をうけあり一命に換る寶やあらん且多乃
 人の命も救ふとあぬ我身小急せん終の金銀中一人命を救ふ
 の袖と做し申さんまう尊人只顧憐を垂玉と低頭辛身一と
 終とてまう道人のつとてた計の心底あつ救ひ給とせん取黄

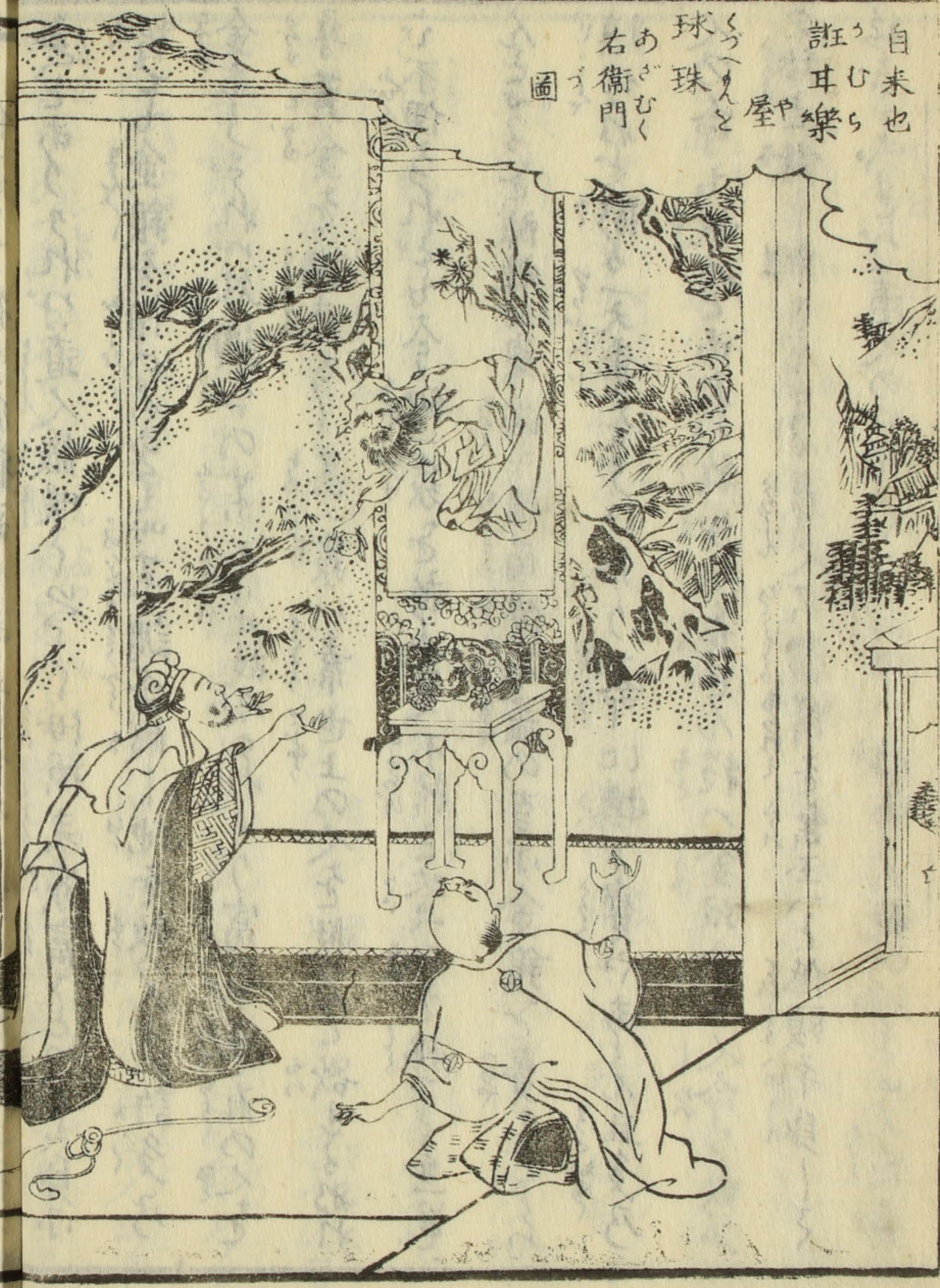
此夏大人に相見の上張ゆくと特々尋まうり一うりとありけれの

三二



古今圖書集成

十



自來也
誑耳樂
球珠屋
あむく
右衛門
圖

古今圖書集成

金とも今二千金を申し其一家を始許多の人命をとりて
 得るもんある時を這陰徳母が身小報ひ倍家富繁栄なる處
 とぞと因より主人大い改ひ速小一千金と取申道人の前小差
 並に道人の延連する從者呼ぶく這を箱に收拾前々拿歸
 らせく後主人小迎ひくくまう八月十五夜の珠小雲晴清め
 くる月夜ちれの此夜渾家と清浄小做し所く小火を點し衣服
 を改免香を焼予と待べし其夜まの上刻茶を携り此家小到
 るありの夢と疑ひの夏ちられと尔一畢くま出るとまへるが那
 道人の款象其終不看成われを疎疎た出つる道人の後を禮拜
 一儲其日とゆるりた程ゆく時去月末て今日を八月十五夜小成

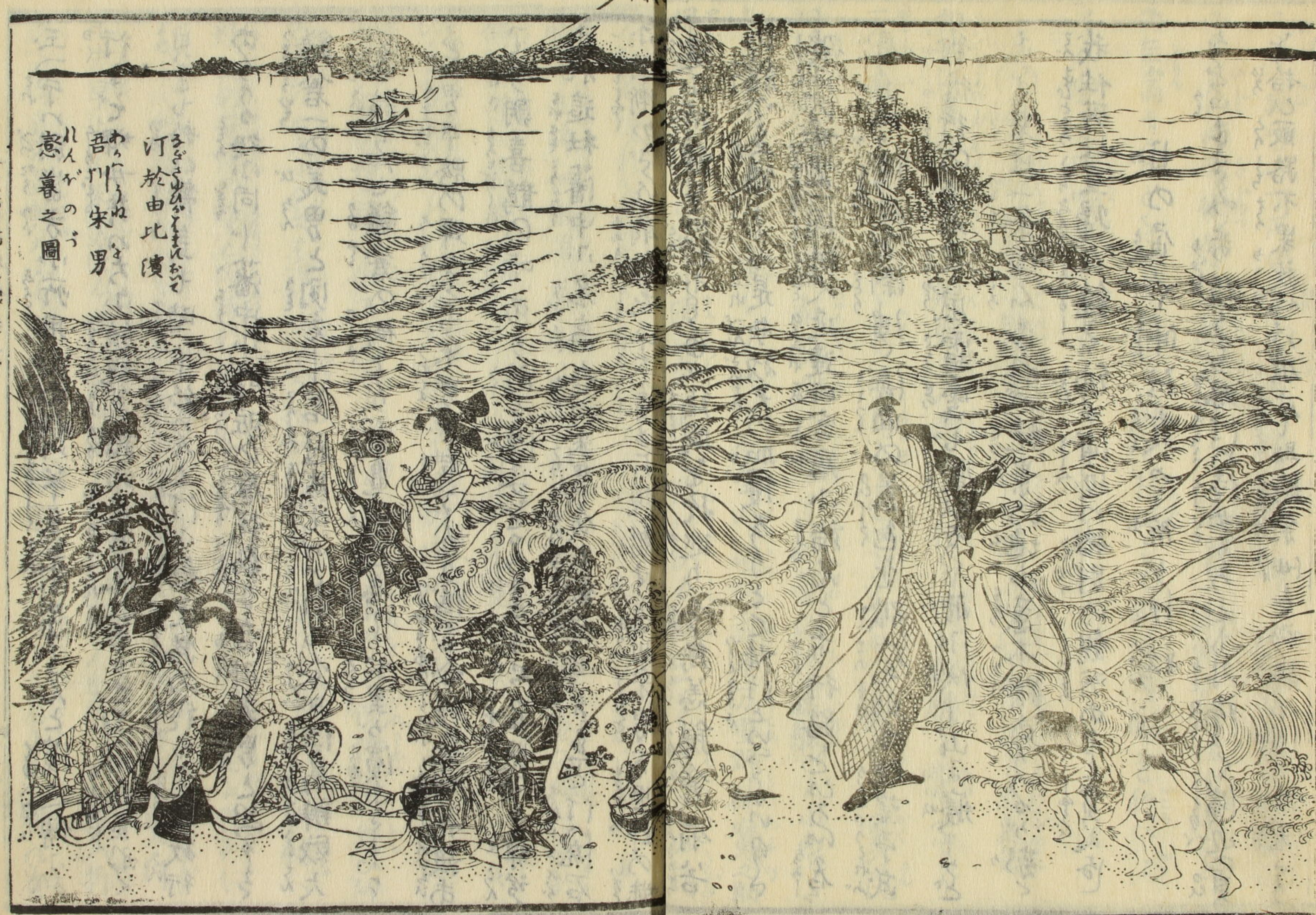
りれの早天より起立渾家を清免暮小及べ四下に燭を照し香を
 焼衣服を改め時刻今やと俟て小疾成の刻とも是れは頃より
 空搔曇雨雲覆ひるり月明光を失ひ率に雨雲霧降出しま
 の朝頃の倍倍く這者吳人の言小差ふ如何と主人始渾家の名
 共不審想か知小其夜の曉迫雨降り道人の到る候も形く
 夫より歳日と過せとも何の沙汰もあらざるが疎疎たる渾家の
 奈小相違して始く誑せしことをころつさうがさうめても一軸の
 奇特こそ怪りれと那掛物を取申し觀くあれは愿末あり客象
 小替らば仙人の畫を推しつる画像の上に自來也と記しあり
 されが傳の因なる盜賊自來也の所なると帝疑ひ不暗而已

ふく、遂小二十両の金を奪ひとらむ。ちりこれ自末也。妙香山
小て吳人の奇術と信。継越後より鎌倉へ去歸。過往球珠ちり
の巨富ちりこととさく。つと術と極て期り奇術を行ひ、
くれ金をと哄喘取らむとあり。ふかと形と

○万里野破魔之助於金龜山得石螺 併妹汀于吾川采男意裏糸

相列江島郡金龜山辨賤天の諸人歩行を運ひ諸願を折言ふ。より
一入小威を塔く尊く必貝の島山よと四下小海原を眺望し奥の院
の海辺の岩屈小女置勸請做し奉り絶景の地靈驗こと小あつこ
ちり宮居まくと座りり此小石堂暗眠の近臣万里野破魔之助
保養とつりりのこ一頃日本武者後行の願あつて發足の利

這小祈願をい新あつり。諸國を巡り今無恙鎌倉君扇告
の館小去歸し是は天の加護ありとて妹汀といふ。いぬ
破魔の女兒一同供人延連此宮居小詣んと歩行路をひろむ。右
負由比ヶ濱辺を測はし海面の景色を破り足助も眺望予武
術後行の頃へ寒風霜雲も厭ひちり此小伏し山は寝くこと
由と磨此一条小ふあれは絶景の地也意不跟ありつるか。期り
我住所に去歸る饒く。浦辺の格別の觀所ありとて賞美を
目の届く仲た處や帆りけ。船
ちり口まをみ歩行うち妹汀の侍女ありとも外路く濱辺の貝
を拾ひ取路不果放行の破り助絶余世を辭靜小後より末より



吾川宋男
意暮之圖

自... 言... 卷二

玉一平の別當方小所用もあれハ羊鳥先小まうらんと濱辺傳小列
行もど婢女共ハち小欣悦気詰の兄君先にゆくを玉一平ハ直ハ
貝をも拾ハ鬱気も暗しゆんといふ勸免路の程も不果放行
ありりり処小同い藩中小暗暁の扈從執る吾川采男とどつら
鎌倉一の美男と関え一若冠成しぐこれハ今日江島辨殿天
一糸詰見んと鎌倉の衙より金龜山と志し七里ハ濱小ま一
と男卑魁の婢女ども采男を看るより低言合昨夜燈花報あ
る今朝喜鶴の噪あり初ハ僕子とらるあつせり女児もも尊後
あれ這社藩中小名高吾川采男及と歡噪嗶々として行ハ流石
小面漸ハび扇の花平太看せハ視智す吾川采男万里野の妹
と知ハはれど茲近言も不替り一づの艶ある容貌小権一見
惚々も停何執寄泳縁よりと何ハ拾ハ濱貝ハ糸の榜侍女共
僻靜傍ハ近寄く卒尔形く此方ハ先程より拾ハ得ハ種々
の色貝多ゆれハ君の拾ハ玉ハ貝の中流るる貝もまづハ
此方の貝と替換小做玉をうとありゆれハ采男ハ僥倖ハと思ハ
と女ハ夏小をまづれ當今拾ハ一此貝ハ倍小子女貝と云ハ稱ハ
婦人の安産の守とも成ハゆらとこれの女児ハ必ハ定るハ方ハ
まづハ産ハ女の大直と関ハ這ハ社ハわつせとと指出ハ女児ハ
も老早ハ采男ハ迷ハ初ハ男ハと夫ハと足ハ入ハ手ハ想ハ折
らるるハ一画漸ハ手ハ手ハ一那子女貝接ハ君ハ賜ハ

らるるハ一画漸ハ手ハ手ハ一那子女貝接ハ君ハ賜ハ

下を穿ちよ石櫃のあるべれを中の一の石螺ひえあれは這を取得く
 又歸り永く其家の重寶とちんべれなり茲石螺の奇物といふを
 一回這を吹鐘る時其音救十里小郷音悪魔天邪を追退障俾
 と拂ふ名器とてあり畢く光明放忽心欲の矢玉の保養感懐時
 小銘い以後二度禮拜一力を揮く巖を刎退刀の鞘以土さう
 くと一程の白氣をよるととらるが神女の告に羊角不差一の木槌
 堀中の中を用む尺計の石螺あり破る助をれを取上押頂石
 櫃のえの如く小納の虫懐中うくる包袱もく那石螺は袋と包
 這を推りへ岩屈より立出る折柄岩坊小丹弥といはる十五六歳
 の児のありけり原素絨人あるりのありけり前より産を現破る助
 の動靜は規ひ今得る石螺を累小好く何卒棄てん
 とどるるや不敵もも洞口より待苦不知何んちく立出る破る助
 此手小提拿る石螺乃包を急小恙棄て山手の方へ逃出せむ
 這者狼藉奴推参ちる小冠者ちと跳掛つて捕り押へ包挑り
 怒りの余り片手小児を延擲岩上より眼の下なる海の深く打込
 丹弥は二三度浮つ沈つ潮水食く其俣小底の藻屑と消失し所ハ
 今も名小残る児が劇とぞ云傳ゆ

此頃於一笑夏ありし金龜山の僧某那児と禿道の好身あり
 其のよりあつたに丹弥那僧小多る負操ありて海底小沈死せり
 と后々人々の言過ぐるを那僧聞て之を哀れ小想ひ俱小其劇小

破魔
之助
金龜山得
石螺圖



言行作卷之一

天竺古金龜山

二二二



身を投し死せんと海辺小到し、あまの命惜やうん

のうともに身をさげをそとあひくとも

むらの岩であまなりかき

那く流まをそ場より竹比へ退るやをあまの行方派あしげ

とらん實抱腹一話よくとありぬ

問話休題破六く助の妹江々あらい古川采男諸共小江の島に到て

宮居に詣ゆ此所那所破六く助と手ぬども不遇行待女とも

伴ひの夏小相心あしひ兄君うろ宿坊小坐ひらん那所も気結り小侍

んめ海辺の茶店小權一歇て待合玉いちと否む采男も延連く龍鼻

屋との茶店の大坐を借り酒肴調へ采男を款待透を見合婢女

ども媒ちて遂小采男江の中と執持此樓上小二個あんな仮寝の枕とる

比翼のくくらあしいさくるととあうる小あんな日此邊小羊点あんな俠客と呼

鸚の獲平あんなとり無頼者ありうろが先程より茲茶店あんなみく采男江

の動靜あるを知り憤りあんな両刀常々と傍小人もあんなを気ちる拳動

こと意憎くれもあんな終小見道一あんな家ぐ一分不立と義児三三個恙

連末り龍鼻屋小入とあんな言く罵と茶店も絶方便ぬればこのち又

采男等も同取那くあんな知小永居くこの場所悪くと衆皆表へ立出るを

獲平の采男を捕へあんなとめく悪口雜言と吐ども采男も身小保あれば

種々詫めりあんな不吹入後うろ西三個打寄拳を擡く采男併附とる

うろ部迫を散く小打擲ちあんなられの采男も人前とく今あんな詮まさく

着頭と以て一個を捕くま跟ぶ怒て列位跳掛るを踢倒刎跟
 働とも原末葉弱非力の采男己小危くまいれを堪兼て行
 采男の差添拔取先小進一鶴の肩先四五寸切りの這者口惜やと
 獲平義児一同小腰釵抜合と切く掛る采男も疾足迫ちりと
 腰の抜持切結ひ目指對手へ獲平と帝一刃小撃て捨れば進行義児
 采男行々押迫追詰大袈裟衣小袈裟衣一斬併此光景一
 婢女どもあわくくわめき逃迷ひとろのりの喧喧ごと一山大に
 噪動一右往左往一進行の采男行ハ血ヲ拭ハ欺く大勢を過
 一うハ中も存かんまへわくねども果夫下綫の奴原一擲と那
 らんも残念念ちり一先此場を退生死ハ一極んと海辺の度

場着てゆれば折しも妻の汝于浮僥倖ひと訂を延連騒の紛
 街道成志してど落行り何ふ不知喧嘩よと物噪因を
 破廣之助も宿坊を立出妹や如何ところの所へ来ころを觀るより
 侍女婢女ハ走りあ後く動靜を結るよど破エノ助大小怒り
 悪化拵等不存存の妹行欺る噪を惹出ー某近の家名の
 澁窪遠くハ行ゆ追跟く封く捨んと跑出足手にまるとか
 婢女ども式々踢倒撲倒二個の後をど慕ハ行

